研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
		の編集者名					
高梨潤一		鳴 医 学 会 Proton	Proton MRS の臨床有用性 コンセンサス ガイド 2009 年度版	共鳴医学 会		2009	32-42
i J.	Moyamoya disease in child- ren		10 th Asian & Oceanian Congress of Child Neuro- log–AOCCN- (book)	d S.r.l.	Bologna	2009	101-10 7

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
井上 健, 小坂 仁	Pelizaeus-Merzbacher 病-Double, Double ··· and Trouble-		50(7)	881-887	2009
Yamashita F, Sawano Y,	The P86L common allele of CALHM1 does not influence risk for Alzheimer disease in Japanese cohorts.	Genet B			in press
Aoyama H, Iwamoto H, Kimura S, Nagai J,	Mild phenotype in Pelizaeus-Merzbacher disease caused by a PLP1-specific mutation.				in press
Tsuji M, Aida N, Obata T, Tomiyasu M, Furuya	A new case of GABA transaminase deficiency detected with proton MR spectroscopy	Dis			in press

G, Jakobs C, <u>Osaka H</u> .					
Kabuta T, Setsuie R,	Proteomic and histochemical analysis of proteins involved in the dying-back-type of axonal degeneration in the gracile axonal dystrophy (gad) mouse.	Neuroche m Int.	54	330-338	2009
Sawaishi Y, <u>Osaka H,</u> Mazaki E, Inoue I,	De novo mutations of voltage-gated sodium channel alphaII gene SCN2A in intractable		73	1046-53.	2009
Fujita K, Aida N, Asakura Y, <u>Kurosawa K,</u> Niwa T, Muroya K et al.	CHARGE syndrome.	Neuroradiol	30	629-34.	2009
Kondoh T, Ohashi H,	Molecular karyotyping in 17 patients and mutation screening in 41 patients with Kabuki syndrome.		54 · ***	304-9	2009
· ·	Prenatal Findings of Paternal Uniparental Disomy 14: Report of	gair nama Anasak gair nama Anasak		uromerania Uori (You Kristas Shapor Valist (You	in press
Tsuyusaki Y, Yoshihashi	1p36 deletion syndrome associated with Prader- Willi-like phenotype.				in press
	Diffuse cerebral hypomyelination with cerebellar atrophy and hypoplasia of the corpus callosum.		31	582-587	2009
Takanashi J.	Two newly proposed encephalitis/encephalo pathy syndromes.	Brain Dev	31	521-528	2009
<u>Takanashi</u> , Tada H, Terada H, Barkovich AJ.	Excitotoxicity in acute encephalopathy with biphasic seizures and late reduced diffusion. report of 3 cases.	Neuroraiol	30	132-135	2009

	bral cortical develop- ment in oral-facial- digital syndrome type VI.	Neuroraiol	30		2009
<u>Takanashi</u> <u>J</u> , Tada H, Maeda M, Suzuki M, Terada H, Barkovich AJ.	reversible splenial	Brain Dev	31	217-220	2009
Komoike Y, Shimojima K, Liang J-S, Fujii H, Maegaki Y, Osawa M, Fujii S, Higashinaka gawa T, <u>Yamamoto T</u>	GABARAP on 17p13.1 by knockdown zebra-	Genesis			in press
Komoike Y, Fujii K, Nishimura A, Hiraki Y,	downs imply roles for human YWHAG in infantile spasms and				in press
K, Saitsu H, Miyake N, Mizuguchi T, Matsu moto N, Osawa M, Kohno Y, Higashinaka gawa T, Yamamoto T	. 4314 a.s.	Alle Commence of the Commence		tiene.	
Shimojima K, Inoue T, Hoshino A, Kakiuchi S, Watanabe Y, Sasaki M, Nishimura A, Takeshita-Yanagisawa A, Tajima G, Ozawa H, Kubota M, Tohyama J, Sasaki M, Oka A, Saito K, Osawa M, and Yamamoto T	applied by array-CGH and fiber-FISH analyses identified new mutations and variable sizes of duplications.	an ang line. Kalangan ang line kalanga Ang ang line kalangan ang l		Selliei Sirteov i i i Absabil i i i Sirteovesv	
Shimojima K, Inoue T,	A familial 593-kb microdeletion of 16p11.2 associated with mental retardation and hemivertebrae.	Genet	152	433-435	2009
Y, Tohyama J,	TULIP1 (RALGAPA1) haploinsufficiency with brain development delay.		94	414-422	2009

<u>Yamamoto T</u> :					
Shimojima K, Yamamoto T	ACTA2 is not a major disease-causing gene for moyamoya disease.	J Hum Genet	54	687-688,	2009
Ohno K, Sugiura C, Une	A newly recognized microdeletion syndrome of 2p15-16.1 manifesting moderate developmental delay, autistic behavior, short stature, microcephaly, and dysmorphic features: a new patient with 3.2-Mb deletion.		46	645-647	2009
Shimojima K, Tanaka K, Yamamoto T	1	Genet A	149A(6)	1359-63	2009
Shimojima K, Yamamoto T	Investigation of the candidate region for trigonocephaly in a patient with monosomy 9p syndrome using array-CGH.	Genet A	149A	1076-1080	2009
Shimojima K, Adachi M, Tanaka M, Tanaka Y, Kurosawa K, <u>Yamamoto</u> T	Clinical features of microdeletion 9q22.3	Clin Genet	75	384-393	2009
Shimojima K, Páez MT, Kurosawa K, <u>Yamamoto</u> <u>T</u>	1		31	629-33	2009
Kibe T, Miyahara J, Yokochi K, <u>Iwaki A</u> .	A novel PLP mutation in a Japanese patient with mild Pelizaeus- Merzbacher disease.	Brain Dev	31	248-251	2009

Tateishi T, Hokonohara Mu	Iultiple system degene-	Acta	in press	
T, Yamasaki R, Miura S, rat	ation with basophilic	Neuropathol.		
Kikuchi H, <u>Iwaki A</u> , ind	clusions in Japanese			
Tashiro H, Furuya H, AI	LS patients with FUS			
Nagara Y, Ohyagi Y, mu	utation.			
Nukina N, Iwaki T,				١
Fukumaki Y, Kira JI.				

	1885 - NSE	

研究成果の刊行物・別刷 (抜粋)

Pelizaeus-Merzbacher 病

井上 健*¹(いのうえけん) 小坂 仁*²(おさかひとし)

-Double, Double ... and Trouble-

*¹国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第二部 *²神奈川県立こども医療センター神経内科

要旨

Pelizaeus-Merzbacher病 (PMD) は中枢神経系の髄鞘形成不全を特徴とするまれな X 連鎖性疾患である. 原因遺伝子 PLP1 の変異でもっとも頻度が高いのは、遺伝子全体を含むゲノム領域の重複である. 本稿では、ゲノム重複の発見とその診断法の開発について解説する. PLP1 の変異には、重複以外に点変異や欠失などがある. 変異によって異なる分子病態を介してさまざまな重症度の表現型を引き起こすので、PMD の遺伝子診断は予後の推定や将来の治療法の選択に重要である.

Key words:ゲノム病,遺伝子重複,ミエリン,遺伝子診断,分子病態

はじめに

表記の副題は、われわれが Pelizaeus-Merzacher 病(ペリツェウス・メルツバッハ病: MD) の原因遺伝子変異として、それまで知ら ていた点変異とは別に、ゲノム重複 (geomic duplication)が疾患の主要な原因である とを 1996 年に American Journal of Human Genetics に報告した時に¹⁾。その号の巻頭に当 時PMD 臨床研究の第一人者であった故 Hodes 博士が記した Invited Editorial のタイトルであ 3º. PMD の原因遺伝子である proteolipid protein 1 遺伝子(PLP1)のコピー数の変化が PMD の原因となりうることは,X 染色体の可 視的な(巨大な)部分重複をもつ患児が PMD 麓の症状を呈することから、あるいはサザンブ ロット法で PLP1 遺伝子シグナルの増強を示 す患者がいることから、ある程度予期されてい た334)。しかしながら、遺伝子の質的変化ではな く, 重複や欠失 (deletion) といったゲノム構造 変化(structural change)による量的変化がヒ トの遺伝性疾患の原因になるという genomic disorder(ゲノム病)という概念そのものがま

だ一般的ではなかった50.

われわれのこの仕事は、蛋白コード領域の変異がない多くの典型的な PMD 患者において、PLP1 遺伝子ゲノム領域が重複することが、PMD の主要な遺伝的病因であることを示すことができたばかりでなく、ゲノム病の疾患概念の確立にわずかながら資することができたのではないか、と考えている、本稿では、その発見からその後の研究の展開を追いながら、PMDの遺伝子診断と分子病態について解説する。

I Pelizaeus-Merzbacher 病の PLP 1 遺伝子重複の発見

PMD は、中枢神経系の髄鞘形成不全(dysmyelination)を病理学的な本態とする X 連鎖遺伝性疾患である⁶¹. すなわち、1 次的な髄鞘化の行程そのものを完結できないことが病態であり、他の多くの白質変性症のように、一度完成した髄鞘があとから破壊される(demyelination)のとは異なる。 臨床的には、生後の発達発育の遅れに加え、多くは1カ月以内に気づかれる眼振が特徴的である。生後半年ぐらいまで

連絡先: *1〒 187-8502 東京都小平市小川東町 4-1-1

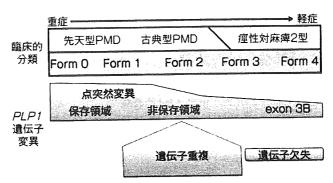


図 1 PMD と SPG2 の臨床分類と PLP1 遺伝子変異の 関連

上段は従来の分類と Boespflug-Tanguy らによる分類. 左から右に行くに従い. 臨床的には軽症となる. 下段は対応する PLP1 変異を示す. 点変異は重症な先天型での頻度が高いが. 古典型や痙性対麻痺でもみられる. 重複はもつとも頻度が高く, 古典型に多い. 欠失は非常にまれで. ニューロバチーを合併する点が特徴的である.

の早い時期は筋緊張の低下、後には小脳失調やアテトーゼ様の異常肢位を伴う痙性四肢麻痺が主徴になる。最重症型の先天型(connatal form)、もっとも頻度の高い古典型(classic form)、そしてより軽症な痙性対麻痺2型と分類されるが、実際には重症度に応じた連続的なパラダイムを形成するので、より詳細な臨床的徴候に基づいて5段階に分類したBoespflug-Tanguyらの分類"が有用である(図1)。

PMDが中枢神経系の主要な髄鞘蛋白をコードする PLP1 遺伝子の変異で起こることは、1989 年に先の Hodes ら他により報告された899. これは、遺伝性神経疾患の原因遺伝子の同定としては、比較的早い部類に入る。同時としては、比較的早い部類に入る。同時を行えるが、画像検査で診断を行えるようになったことは、臨床現場では画期的な進歩であった。PMDの MRI 所見は非常に特徴的で、T2 強調画像で皮質下の白質に至るまで、大脳白質全体にびまん性の高信号を呈する(図 2-a). 画像診断の進歩に伴い、生化学的な確定診断の必要性も高まり、PMD 症例の PLP1 遺伝子解析が行われた。しかし、期待とは裏腹に、

PLP1 遺伝子のコード領域に変異が見つかるのはわずかに 2~3 割の症例のみで、臨床的には典型的と思われた症例に変異がない、つまり臨床的に一疾患単位として考えられていた PMD に変異のある症例群とない症例群が存在するという、非常に不可思議な状況が生じたのである。

冒頭で述べた通り、その当時いわゆるゲノム 病の疾患概念はまだ存在しなかった。ゲノム病 とは、疾患遺伝子を含む比較的大きなゲノム領 域の欠失や重複、あるいは反転 (inversion) と いったゲノム構造の変化が原因で起こる遺伝性 疾患を指し、現在 PMD はゲノム病の代表的な 疾患の一つとして数えられている. PLPI 遺伝 子のゲノム変異が主要な PMD の遺伝子異常と して「再発見」される前に、いくつかそのプロ ローグとなるような知見が存在した。PLP1 遺 伝子を含む大きな染色体領域の重複をもつ症例 で、PMD 様の痙性麻痺や発達遅滞がみられた こと³. 正常 PLP1 遺伝子を過剰発現するトラ ンスジェニックマウスが髄鞘形成不全を呈する こと^{[0]11}, そして染色体異常を伴わない PMD2 家系のサザンブロット法において PLP1 遺伝 子のシグナルが増強しており、遺伝子重複が疑

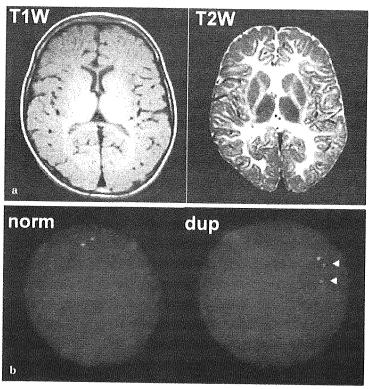


図 2 特徴的な PMD の MRI 画像と FISH 法による *PLPI* 重複 の同定

- a: 典型的な PMD 患者の MRI 所見。TI 強調画像(左) では明らかな異常を認めないが。T2 強調画像(右)では基底核から内包。脳室周囲。皮質下の白質に至るまでびまん性に著明な高信号を認め、髄鞘形成不全を示す。
- b : 間期 FISH 法を用いた PLP1 重複の遺伝子診断. 正常(左)では1つの PLP1 シグナル(赤)と同じ X 染色体上の対照シグナル(BTK: 緑)1つのみ観察されるのに対し. PMD 患者(右)では PLP1 シグナル(赤)が2つ観察され(矢頭). PLP1 遺伝子を含むゲノム領域が重複していることを示す.

われたことである!

これらの知見をもとに、われわれは PLP1 遺伝子コード領域に点変異がない PMD 症例について、PCR による PLP1 遺伝子量の検定のための半定量解析法(現在の定量的 PCR に比べるとはるかに原始的ではあるが、原理は同じである)を開発し、これを用いて PLP1 の重複の有無を検証した。驚いたことに、点変異のないPMD5 家系のうち 4 家系で PLP1 遺伝子量が2倍に増加していたのである。。正常な遺伝子

のコピー数が1つ増えることが、PMDの主要な遺伝子変異であることがこのとき明らかになったのである。

Ⅲ PLP1 遺伝子重複の検出法

当時の PCR 半定量解析法は、そのまま診断 に用いることができるほど、簡便かつ信頼度の 高いものではなかった、遺伝子重複の診断を積 極的に行うためには、より信頼度の高い方法を 開発する必要があった. そこでわれわれは、患 者のリンパ球の核を顕微鏡下に観察し、蛍光で ラベルした PLP1 遺伝子のコピー数を直接数 える間期 FISH (interphase fluorescence in situ hybridization) 法を用いた⁽²⁾. FISH 法を 用いると、患者男児や保因者の女性は、通常1 つしかない(女性は2つ)PLPI 遺伝子のシグ ナルが2つ (保因者では3つ) 観察され、PLP1 遺伝子が重複していることを明瞭に観察するこ とができる (図 2-b)、筆者が米国でこの診断 法を確立し,数カ月後には臨床細胞遺伝検査室 での細胞遺伝学的検査として一般臨床に応用さ れた、研究レベルでの成果を臨床に応用する迅 速さは驚くべきものであった。FISH 法を用い た多数症例の遺伝子診断により、PMD 症例の 半分以上はこの PLP1 遺伝子の重複が原因で あることが明らかになった[2].

FISH 法は遺伝子診断のみならず、PLP1 遺伝子の重複の大きさや向きについてのゲノム解析に大きな力を発揮した。驚いたことに、PLP1 の重複の大きさは症例により多様で、しかしながら重複の向きはすべての症例で直列繰り返し(タンデム配列)であることがわかった^[2]。後述するが、これはゲノム病一般に知られているメカニズムからすると特異であり、どのようにしてこのゲノム重複変異が起こるのかは、いまだに不明である。

重複の領域の大きさに幅があるということは、もしある恵者のゲノム重複の大きさがFISH 法の検出限界 (約50 Kb) よりも小さい場合は、見逃してしまう可能性があることを示唆する。実際に、そういった症例がまれながら存在することが明らかになるにつれ、他の解析方法が必要になってきた。そこで導入されたのがリアルタイム PCR である。これは、増幅された DNA 量を経時的にモニターすることにより、元の鋳型 DNA 量を正確に定量することができるシステムである。RT-PCR を用いることにより、少量の DNA のみで PLP1 重複の診

断ができるようになった。現在、本邦で PMD の遺伝子診断を診療の一部として行っている神奈川県立こども医療センターではこの方法を採用している(図3).

さらに近年は、DNA チップを用いたアレイ CGH (array comparative genomic hybridization) を用いて、PMD を含むゲノム病すべてに 関与するゲノム量の変化を網羅的に検索できる 方法も開発され、米国を中心に臨床応用されている。この方法を用いることにより、複数のゲノム病の検索が一度にできるのみならず、重複 (あるいは欠失)がゲノム上のどの範囲にわたって起こっているのかなどの詳細なゲノム情報 を、たった1回の解析で得ることができる¹⁵

III PLP1 遺伝子変異と臨床表現型との関連 ─PMD と遺伝性痙性対麻痺

PLP1 遺伝子変異の種類と臨床表現型との間 に、一定の関連性があることが明らかになって いる (図1)7. まったく髄鞘化が起こらず、多 くが 10 歳代で死亡する最重症型の先天型の症 例は、PLP1 コード領域のうち、進化的に保持 されているアミノ酸(つまり変異が起こると種 として維持できなくなる部位で、機能的に重要 であることが示唆される)のミスセンス変異に よる症例が多い、もっとも頻度が高く、臨床的 にもある程度の発達を獲得する古典型では遺伝 子重複の頻度がもっとも高く、遺伝子診断には まず重複の検索を行うべきである。それ以外の 症例では、アミノ酸置換型の点変異が見出され る。さらに、臨床的には痙性対麻痺に分類され るような症例も、PLP1変異が原因となること が明らかになった.

遺伝性痙性対麻痺は、常染色体優性、劣性、 X 連鎖性とさまざまな遺伝形式をとり、多くの 疾患原因遺伝子が存在する遺伝的多様性を有す る疾患群である。このうち、X 連鎖性痙性対麻 痺2型(SPG2)に白質病変を合併するものが存

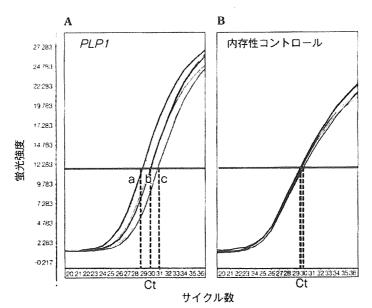


図3 RT-PCR (ΔΔCt 法) を用いた *PLP1* **重複の遺伝子診** 断の実例

ある一定の蛍光レベルに達したときのサイクル数 (Ct) を内因性 コントロール遺伝子の Ct で正規化 (ΔCt) した後に検体間で比較する (ΔΔCt) ことにより、遺伝子のコピー数を検定する方法.

A: PLPI 遺伝子エクソン 7 を用いたリアルタイム PCR の検量線 a: PLPI 遺伝子重複の保因者女性, b: PLPI 遺伝子重複をもつ 患者男性, c: 正常男性を示す.

B:内因性コントロールに対するリアルタイム PCR の検量線. 一定の蛍光強度 (横線) に対応するサイクル数 (Ct) を示す. $\Delta\Delta$ Ct 法により PLP1 遺伝子のコピー数は、a:b:c=3:2:1 と 判定された. ここでは DNA 濃度をそろえているため. 内因性 コントロールに対する Ct にはほとんど差がみられない. n=3. (提供:神奈川県立こども医療センター永井惇一専門技師)

在することが知られていたが、これらの家系に PLP1 遺伝子の変異が見出されたことから、 PMD と SPG2 は異なる疾患ながら、同じ遺伝 その変異が原因で起こること、すなわち対立遺 长子疾患(allelic disorders)であることがわ かった¹⁰¹⁵⁾

SPG2 型の臨床経過をとる症例にみられる変異には、次の3種類が存在する。まず、2つあるPLP1の選択的スプライス産物(蛋白レベルでは、長いPLP1とエクソン3の後半35残基分が欠ける短いDM20)のうち、PLP1に特異的な35残基の部分(エクソン3Bとよばれる部

分)にアミノ酸置換が起こり、その結果、PLP1 蛋白のみが変異体となるが、DM20 には変化をきたさないもの、次に、進化的に保持されていない部分(すなわち、機能的に必須でないと予想される場所)にアミノ酸置換をきたすもの、そして、PLP1 ゲノム領域の欠失や翻訳開始領域近くのナンセンスコドン変異など、PLP1 蛋白産生そのものが欠落するものである「617」。

興味深いのは、3つ目の欠失例で、PLP1蛋白が存在しなくとも臨床表現型は比較的軽症であること、すなわち生体にとって変異体 PLP1蛋白や過剰量の野生型蛋白の存在は、PLP1が存

在しないことよりもずっと有害であることを示唆する。また、PLP1 は微量ながら末梢神経の髄帽にも発現されているが、欠失の症例のみで軽度ニューロパチーを呈することが知られている。臨床的にはより重症な重複あるいは点変異の症例では、末梢神経症状は電気生理学的な検索をしても検出されない。この分子病理メカニズムは、まだ解明されていない。

IV 今後の研究の展望

今後、PMD を取り巻く研究の進歩は2つの 方向性をもっていくと考えられる。まず第1 に、ゲノム重複のメカニズムを明らかにするこ とである。なぜ、ヒトゲノムの特定の領域に重 複あるいは欠失が繰り返し起こり、多くの同一 の疾患が世界中で引き起こされるのであろう か、この疑問は、多くのゲノム病、例えば Charcot-Marie-Tooth 病 1A 型や Williams 症 **候群などについては、ほぼ解明されている、詳** 細は他書に譲るが、一般的なゲノム病の発生メ カニズムには、ヒトゲノムの構造的な特徴が大 きく関与している. その中でも, 疾患責任遺伝 子を含むゲノム重複あるいは欠失領域を挟んで 存在する巨大(数十から数百 Kb)な繰り返し 配列 (low copy repeat: LCR) の間で非均等相 同性組み換え(non-allelic homologous recombination) が起こることが、その分子機序とし てほぽコンセンサスになっている¹⁸⁾. したがっ てどの患者でも同じ場所で同じ大きさのゲノム 変異が起こる。これに対して、PMD はそう いった位置関係にある LCR が存在せず、また 重複あるいは欠失ゲノム領域の大きさが患者ご とに異なるというユニークな特徴をもってお り、まだそのゲノム変異の機序が確立されてい ない(3)。しかし、最近この特異的なゲノム構造 異常が、組み換えではなく複製のエラーである という仮説が提唱されており、これが今後検証 されると思われる191.

第2は PMD の治療法開発に向けた取り組み である。現在 PMD に対する有効な根治療法は ない。しかし、分子病態の解明や新たな遺伝子 工学あるいは幹細胞技術などの進歩により, さ まざまな治療の可能性が生まれてきている. 薬 剤による治療法開発のためには、変異によって 異なる分子病態に沿った治療薬を見出す必要が ある。点変異によるアミノ酸置換を伴う変異 PLP1 蛋白は,細胞内小胞体に蓄積して細胞毒 性を発揮すると考えられている。であれば小胞 体ストレスを軽減するような楽剤に治療効果が 期待できる。また、PLP1 重複は遺伝子産物の 過剰が原因であるので、PLPI の発現を低下さ せるような薬剤を見出せば治療に用いることが できるかもしれない、現在、こういった仮説に 基づき、治療薬の検索が行われている、RNA 干渉やアンチセンスオリゴなどを用いた PLP1 遺伝子発現の抑制も、PMD の分子標的治療と して期待される. さらに、iPS をはじめとする 幹細胞を用いた細胞移植治療は、今後実用化に 向けた技術革新が進むと期待されるが、PMD もその対象疾患として有力な候補である.

おわりに

発見から 10 余年を経ているにもかかわらず、なぜ PLP1 遺伝子重複が PMD の原因になるのか、そしてこのもっとも頻度の高い変異をどうしたら克服できるのか、問題は未解決のまま、依然われわれの眼前に残されている。 Double、Double…and Trouble, Left Unsolved である.

斌文

- 1) Inoue K et al: A duplicated *PLP* gene causing Pelizaeus-Merzbacher disease detected by comparative multiplex PCR. Am J Hum Genet 1996: 59: 32-39
- 2) Hodes ME, Dlouhy SR: The proteolipid protein gene: double, double,... and trouble. Am J Hum Genet 1996: 59: 12-15
- 3) Cremers FPM et al: An interstitial duplication of

- the X chromosome in a male allows physical fine mapping of probes from the Xq13-q22 region. Hum Genet 1987: 77: 23-27
- (a) Ellis D. Malcolm S: Proteolipid protein gene dosage effect in Pelizaeus-Merzbacher disease. Nat Genet 1994 ; 6 : 333-334
- 5) Lupski JR: Genomic disorders: structural features of the genome can lead to DNA rearrangements and human disease traits. Trends Genet 1998:14:417-422
- 6) Inoue K: PLP1-related inherited dysmyelinating disorders: Pelizaeus-Merzbacher disease and spastic paraplegia type 2. Neurogenetics 2005:6:1-16
- 7) Cailloux F et al : Genotype-phenotype correlation in inherited brain myelination defects due to proteolipid protein gene mutations. Eur J Hum Genet 2000: 8:837-845
- Trofatter JA et al : Pelizaeus-Merzbacher disease: tight linkage to proteolipid protein gene exon variant. Proc Natl Acad Sci USA 1989: 86: 9427-9430
- 9) Hudson LD et al: Mutation of the proteolipid protein gene PLP in a human X chromosomelinked myelin disorder. Proc Natl Acad Sci USA 1989;86:8128-8131
- 10) Kagawa T et al: Glial cell degeneration and hypomyelination caused by overexpression of myelin proteolipid protein gene. Neuron 1994: 13:427-442
- 11) Readhead C et al: Premature arrest of myelin formation in transgenic mice with increased

- proteolipid protein gene dosage. Neuron 1994; 12:583-595
- 12) Inoue K et al : Proteolipid protein gene duplications causing Pelizaeus-Merzbacher disease: molecular mechanism and phenotypic manifestations. Ann Neurol 1999: 45: 624-632
- 13) Lee JA et al: Role of genomic architecture in PLP1 duplication causing Pelizaeus-Merzbacher disease. Hum Mol Genet 2006: 15: 2250-2265
- 14) Osaka H et al : Novel nonsense proteolipid protein gene mutation as a cause of X-linked spastic paraplegia in twin males. Biochem Biophys Res Commun 1995 ; 215 : 835-841
- 15) Saugier-Veber P et al: X-linked spastic paraplegia and Pelizaeus-Merzbacher disease are allelic disorders at the proteolipid protein locus. Nat Genet 1994 ; 6 : 257-262
- 16) Garbern JY et al: Proteolipid protein is necessary in peripheral as well as central myelin. Neuron 1997:19:205-218
- 17) Inoue K et al : Genomic rearrangements resulting in PLP1 deletion occur by non-homologous end-joining and cause different dysmyelinating phenotypes in males and females. Am J Hum Genet 2002: 71:838-853
- 18) Stankiewicz P, Lupski JR: The genomic basis of disease, mechanisms and assays for genomic disorders. Genome Dyn 2006: 1:1-16
- 19) Lee JA, Carvalho CM, Lupski JR: A DNA replication mechanism for generating nonrecurrent rearrangements associated with genomic disorders. Cell 2007: 131: 1235-1247



BRAIN & DEVELOPMENT

Official Journal of the Japanese Society of Child Neurology

www.elsevier.com/locate/braindev

Brain & Development xxx (2009) xxx-xxx

Case report

Mild phenotype in Pelizaeus-Merzbacher disease caused by a *PLP1*-specific mutation

Hitoshi Osaka ^{a,e,*}, Shiro Koizume ^{a,e}, Haruhiko Aoyama ^d, Hiroko Iwamoto ^d, Seiji Kimura ^d, Jun-ichi Nagai ^b, Kenji Kurosawa ^c, Sumimasa Yamashita ^a

a Division of Neurology, Clinical Research Institute, Kanagawa Children's Medical Center, Yokohama 232-855, Japan
 b Division of Laboratory Medicine, Clinical Research Institute, Kanagawa Children's Medical Center, Yokohama 232-855, Japan
 c Division of Genetics, Clinical Research Institute, Kanagawa Children's Medical Center, Yokohama 232-855, Japan
 d Division of Pediatric Neurology, Yokohama Ryoiku-iryo Center, Yokohama 241-0014, Japan
 c Molecular Pathology & Genetics Division, Kanagawa Cancer Center Research Institute, Yokohama 241-0815, Japan

Received 7 May 2009; received in revised form 1 November 2009; accepted 6 November 2009

Abstract

We present the case of a 26 year-old man who developed normally until he began having difficulty walking at age 12. He subsequently became unable to stand at 15 years old and exhibited mental regression and generalized tonic convulsions by age 20. Magnetic resonance imaging revealed incomplete myelination of cerebral white matter, which resembled that of Pelizaeus-Merzbacher disease. By sequencing the proteolipid protein 1 (*PLP1*) gene, we found a novel mutation (c.352_353delAG (p.Gly130fs)) in the latter half of exon 3 (exon 3B) that is spliced out in the DM20 isoform. Exon 3B mutations are known to cause a mild phenotype since they do not disturb DM20 production. Mutations that truncate PLP1 correlate with a mild phenotype by activating the nonsense-mediated decay mechanism that specifically detects and degrades mRNAs containing a premature termination codon. This attenuates the production of toxic mutant PLP1. The very mild presentation in the present case seems to be derived from the unique nature of the mutation, which preserves DM20 production and decreases mutant PLP1.

© 2009 Elsevier B.V. All rights reserved.

Keywords: Pelizaeus-Merzbacher disease; Proteolipid protein 1; PLP1

1. Introduction

Proteolipid protein (PLP) 1 and its splice isoform DM20 are encoded by the *PLP1* gene. PLP1/DM20 proteins are major components of myelin expressed in oligodendrocytes in central nervous system (CNS) [1]. PLP1/DM20 translated in the endoplasmic reticulum (ER) is transported to the cell surface and integrated

into plasma membrane presumably via four membrane-spanning domains with both amino- and carboxy-terminal ends on cytoplasmic side. Owing to its strong hydrophobicity, PLP1/DM20 can form a stable compact myelin sheath in cooperation with other myelin proteins [1]. Expression of PLP1 and DM20 are spatially and temporally regulated. DM20 expresses preferentially in embryonic stages in a variety of cell types, whereas PLP1 expresses postnatally in oligodendrocytes. Both PLP1 and DM20 constitute the predominant protein in myelin [2].

Pelizaeus-Merzbacher disease (PMD) is a severe X-linked recessive disorder caused by mutations of the *PLP1* gene [1]. A deficiency in PLP1/DM20 at the cell

E-mail address: hosaka@kcmc.jp (H. Osaka).

0387-7604/\$ - see front matter © 2009 Elsevier B.V. All rights reserved. doi:10.1016/j.braindev.2009.11.004

^{*} Corresponding author. Address: Division of Neurology, Clinical Research Institute, Kanagawa Children's Medical Center, Mutsukawa 2-138-4, Minami-ku, Yokohama 232-8555, Japan. Tel.: +81 45 711 2351; fax: +81 45 721 332.

membrane by PLP1 mutation leads to the arrest of myelination. Moreover, mutant PLP1 elicits a response in the ER, which attempt to refold the misfolded mutant PLP1/DM 20 protein [3]. However, if the level of misfolded protein exceeds the controllable limit within the ER quality control system, apoptotic signals are transduced from ER [3]. This cellular process is reflected in developmental regression and atrophy of the CNS.

Exonic or intron/exon boundary mutations are found in 20-30% of PMD patients and phenotypes are severer than other mutations such as total deletion and duplication of PLP1. An exception has been observed in the latter half of exon 3 (exon 3B) of *PLP1* [4–8]. Mutations within this region are predicted not to disturb DM20 expression and function. Mutations that truncate PLP1 are related to a mild phenotype presumably by activating the nonsense-mediated decay (NMD) pathway, a mechanism that specifically detects and degrades mRNAs containing a premature termination codon [9]. This attenuates the production of mutant PLP1 levels and thus likely lessens the ER stress responses. In this report, we present a PMD patient with a very mild phenotype. We identified a novel PLP1 gene mutation that is predicted to preserve DM20 production and results in a frame-shifted mutant PLP1 protein.

2. Materials and methods

2.1. Patient

This 26 year-old boy was born uneventfully at full term to Japanese parents. He was born with a body weight of 3660 g and an Apgar score of 9/9 at 1 and 5 min. No stridor or nystagmus was noted. He gained head control at 4 months, could sit without support at 8 months, and could walk without assistance at 4 years. He was pointed out spasticity of lower limbs and EEG abnormalities at 1 year. He was treated with carbamaz-

epine for 14 years. No seizures occurred during that period. He could speak a few words at 2 years of age. He attended a special class in normal elementary and junior high school. He had no difficulties in daily conversation and writings. The patient began having difficulty walking at 12 years of age and became unable to stand at 15 years. He showed frequent urination and was diagnosed as neurogenic bladder at 15 years. MRI taken at that time revealed only mild ventricular enlargement. Myelination was not evaluated because of the motion artifact. At age 20, he showed signs of mental regression and began speaking fewer words. He exhibited generalized tonic convulsions and was treated with valproic acid at 24 years. He was subsequently referred to a hospital for evaluation. He was not small for his ages with a height of 167 cm and a weight of 54 kg. He could conversate with combining two words. He showed no nystagmus and exhibited alternating outer-nystagmus and oculomoter apraxia. He could walk with assistance. His muscle tone was hypertonic in the upper limbs. Clumsiness was observed with all extremities displaying exaggerated tendon reflexes and bilateral extensor plantar responses. Speech was slurred and dysmetry with terminal oscillation and dysdiadochokinesis were observed. Routine laboratory examinations revealed no biochemical abnormalities in the level of serum ammonia, lactate and pyruvate, very long chain fatty acids, or arylsulfatase A. Nerve conduction velocities and electromyographic studies were all normal. Measurement of auditory evoked brain responses revealed only wave I. MRI revealed a completion of myelination in the T1 signal. Myelination in the white matter was incomplete in the T2 signal (Fig. 1).

2.2. Genomic DNA sequencing

Genomic DNA from this patient was prepared from white blood cells using the Wizard Genomic DNA puri-

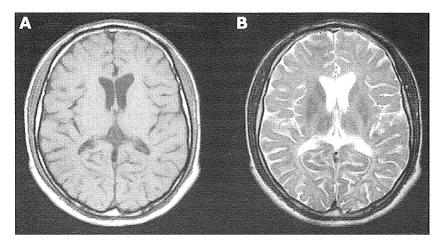


Fig. 1. Magnetic resonance imaging (MRI) at 26 year-old patient shows disappearance of contrast between cortex and white matter (A) on a T1-weighted image. T2-weighted image shows the incompletion of myelination in the white matter (B).

fication kit (Promega, Madison, WI USA). PCR of seven exons and promoter regions of the *PLP1* gene was performed as previously described [10]. Subsequent sequencing analyses of the PCR fragments were performed by direct sequencing using the Big Dye Terminators v1.1 Cycle Sequencing kit (Applied Biosystems Foster City, CA). Duplication was screened by FISH as described [10].

3. Results

By direct sequencing of the patient's *PLP1* gene exons, exon/intron boundaries and a promoter region, we found a novel mutation in exon 3: c.352_353delAG

(p.Gly130fs) (Fig. 2). No other sequence alterations were found and this mutation was not detected in more than 200 alleles. This two nucleotide deletion occurs in the latter half of exon 3 (exon 3B), which is not involved in *DM20* mRNA production (Fig. 3). FISH analysis showed normal copy numbers in this patient.

4. Discussion

Pelizaeus-Merzbacher disease belongs to leukodystrophies, one of a group of disorders that affect the white matter of the CNS. Genetic defects in PLP1/DM20, the most predominant myelin proteins, causes dual pathology: defects in CNS myelin formation (dysmyelination)

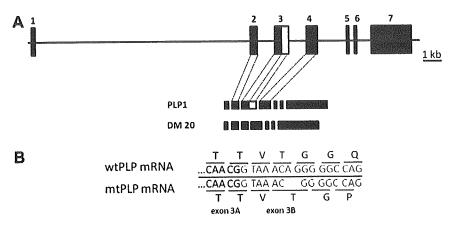


Fig. 2. Splicing the *PLP1* gene into *PLP1* mRNA and *DM20* mRNA. (A) Schematic presentation of *PLP1* gene structure. (upper panel) PLP1 gene is composed of seven exons. (lower panel) mRNA of PLP1/DM20 differs in only the latter half of exon 3 that is spliced out for the production of DM20 mRNA. (B) Two nucleotide deletion and subsequent frame shift in the Patient. Novel mutation in exon 3B, c.352_353delAG (p.Gly130fs), causes the frame shift in *PLP1* mRNA.

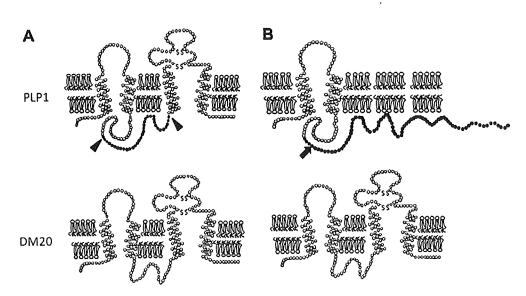


Fig. 3. Deduced PLP1 gene products; PLP1 and DM20. (A) Wild-type PLP1 (upper) and DM20 (lower) which are thought to include 4 membrane-spanning domains. Thirty-five intracellular amino acids (gray circle; between arrow head) are lacking in DM20. One circle corresponds to one amino acid. (B) PLP1 and DM20 of the patient. (upper) A two nucleotides deletion in exon 3B, c.352_353delAG (p.Gly130fs), causes a frame shift (arrow) and extension that are composed of 82 nonsense peptides. (lower) DM20 is identical to wild-type in this patient.

and oligodendrocytes cell loss via apoptosis. PLP1 and DM20 are required for myelin compaction. Mutations in the *PLP1* gene, such as total deletion and truncation mutations, cause an inability to form normal myelin, which is easily revealed by diffuse high signals in all CNS white matter in T2-weighted MRI scans. Since PLP1/DM20 are constitute more than 50% of the protein in oligodendrocytes, mutant PLP1/DM20 cause the excessive ER stress responses and subsequent cell death that can be visualized by MRI/CT as brain atrophy.

Typically, patients with PMD show neonatal nystagmus and developmental delay that becomes apparent during infancy. Impairments of motor functions involve spastic paresis from the defect in the corticospinal tract, intention tremor from abnormalities in the cerebellar pathway, and choreoathetosis and rigidity due to basal ganglia dysfunction. Although all patients exhibit mental retardation, psycho-intellectual development is greater than motor development. Lesions are restricted in the myelinated portion in the CNS but disease severity varies considerably.

Cailloux et al. graded the clinical severity of PMD patients by their maximal motor achievements. Patients with Form 0 never gain head control ability, whereas patients with Form 1 can achieve head control. Form 2 includes the patients who are able to maintain a sitting position. Form 3 includes patients who can walk with support, while patients with Form 4 can walk autonomously. This last form overlaps the clinical phenotype of X-linked spastic paraplegia type 2, the allelic disease to PMD [8]. The patient described in the present case report belongs to Form 4, the mildest symptom group.

Amino acid substitutions, especially conserved amino acids in DM20/PLP1 within species, usually cause a severe phenotype [6]. Duplication of PLP1 causes a milder form, in which patients gain head control or sitting ability. Two types of mutations cause the mildest form of PMD. One type is total gene deletion, a truncation mutation that does not cause the mutant PLP1 that elicit the ER stress responses, and the second is the *PLP1*-specific exon 3B mutation.

Here, we described a patient with a mild form of PMD who could speak meaningful words and walk independently until 15 years of ages. He had two nucleotide deletions within exon 3B which are spliced out during *DM20* messenger RNA production. This mutation preserves the expression and function of DM20 protein. Moreover, this mutant protein is much shorter than wild-type PLP (277/241aa). It should easily be degraded via the activation of nonsense-mediated decay (NMD) pathway, a mechanism that specifically detects and degrades mRNAs containing a premature termination codon. The very mild phenotype observed is probably due to the dual effect of mutation: conservation of DM20 and the inability to elicit an ER stress response.

Thirteen different mutations have been reported in exon 3B (c.384C>G, 385C>T, 388C>T, 409C>G, 409C>T, 410delG, 418C>T, 430A>T, 434G>A, 441A>T, 442C>T, 446C>T). Twelve of them are one nucleotide changes and are predicted to preserve DM20 expressions. Clinical presentations are reported in 9 cases and 6 fit the criteria of Form 4, reinforcing the importance of DM20 function in addition to PLP1. Thus far, only one example of an exon 3B mutation that causes normal DM20 and truncated PLP1 has been reported (440delG; R137fsX8) [6]. This mutation caused two patients with Form 3 and one with Form 4. Our case is the second examples of an exon 3B mutation that produce normal DM20 and truncational PLP1. Our case, together with reports of other exon 3B mutations, supports the hypothesis that frame-shift mutations of PLP1 in exon 3B underlies the very mild phenotype in PMD.

Acknowledgements

We thank Mariko Kitajima for technical assistance. This work was supported in part by Grants-in-Aid from Scientific Research from the Ministry of Health, Labor and Welfare of Japan, Health and Labor Science Research Grant of Japan, Yokohama Foundation for Advancement of Medical Science, Takeda Science Foundation and Kanagawa Municipal Hospital Pediatric Research.

References

- [1] Inoue K. PLP1-related inherited dysmyelinating disorders: Pelizaeus-Merzbacher disease and spastic paraplegia type 2. Neurogenetics 2005;6:1–16.
- [2] Taylor CM, Marta CB, Claycomb RJ, Han DK, Rasband MN, Coetzee T, et al. Proteomic mapping provides powerful insights into functional myelin biology. Proc Natl Acad Sci USA 2004;101:4643-8, [in English].
- [3] Southwood CM, Garbern J, Jiang W, Gow A. The unfolded protein response modulates disease severity in Pelizaeus-Merzbacher disease. Neuron 2002;36:585–96.
- [4] Hubner CA, Orth U, Senning A, Steglich C, Kohlschutter A, Korinthenberg R, et al. Seventeen novel PLP1 mutations in patients with Pelizaeus-Merzbacher disease. Hum Mutat 2005;25:321-2.
- [5] Nance MA, Boyadjiev S, Pratt VM, Taylor S, Hodes ME, Dlouhy SR. Adult-onset neurodegenerative disorder due to proteolipid protein gene mutation in the mother of a man with Pelizaeus-Merzbacher disease. Neurology 1996;47:1333-5.
- [6] Hobson GM, Huang Z, Sperle K, Sistermans E, Rogan PK, Garbern JY, et al. Splice-site contribution in alternative splicing of PLP1 and DM20: molecular studies in oligodendrocytes. Hum Mutat 2006;27:69–77.
- [7] Cailloux F, Gauthier-Barichard F, Mimault C, Isabelle V, Courtois V, Giraud G, et al. Genotype-phenotype correlation in inherited brain myelination defects due to proteolipid protein gene mutations. Clinical European Network on Brain Dysmyelinating Disease. Eur J Hum Genet 2000;8:837-45.

H. Osaka et al. | Brain & Development xxx (2009) xxx-xxx

- [8] Osaka H, Kawanishi C, Inoue K, Uesugi H, Hiroshi K, Nishiyama K, et al. Novel nonsense proteolipid protein gene mutation as a cause of X-linked spastic paraplegia in twin males. Biochem Biophys Res Commun 1995;215:835-41.
- [9] Inoue K, Khajavi M, Ohyama T, Hirabayashi S, Wilson J, Reggin JD, et al. Molecular mechanism for distinct neurological pheno-
- types conveyed by allelic truncating mutations. Nat Genet 2004;36:361-9.
- [10] Osaka H, Kawanishi C, Inoue K, Onishi H, Kobayashi T, Sugiyama N, et al. Pelizaeus-Merzbacher disease: three novel mutations and implication for locus heterogeneity. Ann Neurol 1999;45:59-64.



Brain & Development xxx (2009) xxx-xxx



www.elsevier.com/locate/braindev

Original article

Comprehensive genetic analyses of *PLP1* in patients with Pelizaeus–Merzbacher disease applied by array-CGH and fiber-FISH analyses identified new mutations and variable sizes of duplications

Keiko Shimojima ^a, Takehiko Inoue ^b, Ai Hoshino ^{c,d}, Satsuki Kakiuchi ^e, Yoshiaki Watanabe ^f, Masayuki Sasaki ^g, Akira Nishimura ^g, Akiko Takeshita-Yanagisawa ^h, Go Tajima ⁱ, Hiroshi Ozawa ^{c,j}, Masaya Kubota ^{c,k}, Jun Tohyama ¹, Masayuki Sasaki ^m, Akira Oka ^{k,n}, Kayoko Saito ^o, Makiko Osawa ^h, Toshiyuki Yamamoto ^{a,*}

^a International Research and Educational Institute for Integrated Medical Sciences (IREIIMS), Tokyo Women's Medical University, 8-1 Kawada-cho, Shinjuku-ward, Tokyo 162-8666, Japan ^b Division of Child Neurology, Institute of Neurological Sciences, Faculty of Medicine, Tottori University, Yonago, Japan ^c Department of Pediatrics, Tokyo Metropolitan Hachioji Children's Hospital, Hachioji, Japan ^d Department of Neuropediatrics, Tokyo Metropolitan Neurological Hospital, Fuchu, Japan Department of Neonatology, Tokyo Metropolitan Bokutoh Hospital, Tokyo, Japan f Department of Child Neurology, Okayama University Graduate School of Medicine, Okayama, Japan ⁸ Department of Pediatrics, Kyoto Prefectural University of Medicine, Kyoto, Japan h Department of Pediatrics, Faculty of Medicine, Tokyo Women's medical University, Tokyo, Japan ¹Department of Pediatrics, Hiroshima University Graduate School of Biomedical Sciences, Hiroshima, Japan ^j Shimada Ryoiku Center, Tama, Japan ^k Division of Child Neurology, National Center of Child Health and Development, Tokyo, Japan ¹ Epilepsy Center, National Nishi-Niigata Chuo National Hospital, Niigata, Japan ^m Department of Child Neurology, National Center Hospital for Mental, Nervous and Muscular Disorders, National Center of Neurology and Psychiatry, Kodaira, Japan ⁿ Department of Pediatrics, Faculty of Medicine, The University of Tokyo, Tokyo, Japan ° Institute of Medical Genetics, Tokyo Women's medical University, Tokyo, Japan

Received 22 November 2008; received in revised form 2 February 2009; accepted 22 February 2009

Abstract

Pelizaeus-Merzbacher disease (PMD; MIM#312080) is a rare X-linked recessive neurodegenerative disorder. The main cause of PMD is alterations in the proteolipid protein 1 gene (PLP1) on chromosome Xq22.2. Duplications and point mutations of PLP1 have been found in 70% and 10-25% of all patients with PMD, respectively, with a wide clinical spectrum. Since the underlining genomic abnormalities are heterogeneous in patients with PMD, clarification of the genotype-phenotype correlation is the object of this study. Comprehensive genetic analyses using microarray-based comparative genomic hybridization (aCGH) analysis and genomic sequencing were applied to fifteen unrelated male patients with a clinical diagnosis of PMD. Duplicated regions were further analyzed by fiber-fluorescence in situ hybridization (FISH) analysis. Four novel and one known nucleotide alterations were identified in five patients. Five microduplications including PLP1 were identified by aCGH analysis with the sizes ranging from

0387-7604/\$ - see front matter © 2009 Elsevier B.V. All rights reserved. doi:10.1016/j.braindev.2009.02.011

Please cite this article in press as: Shimojima K et al., Comprehensive genetic analyses of *PLP1* in patients ..., Brain Dev (2009), doi:10.1016/j.braindev.2009.02.011

^{*} Corresponding author. Tel.: +81 3 3353 8111; fax: +81 3 3352 3088 E-mail address: yamamoto@imcir.twmu.ac.jp (T. Yamamoto).

374 to 951-kb. The directions of five *PLP1* duplications were further investigated by fiber-FISH analysis, and all showed tandem duplications. The common manifestations of the disease in patients with *PLP1* mutations or duplications in this study were nystagmus in early infancy, dysmyelination revealed by magnetic resonance imaging (MRI), and auditory brain response abnormalities. Although the grades of dysmyelination estimated by MRI findings were well correlated to the clinical phenotypes of the patients, there is no correlation between the size of the duplications and the phenotypic severity.

© 2009 Elsevier B.V. All rights reserved.

Keywords: Array-based comparative genomic hybridization (aCGH); Fiber-FISH; Fluorescence in situ hybridization (FISH); Pelizaeus-Merzbacher disease (PMD); Proteolipid protein 1 (PLPI)

1. Introduction

Pelizaeus–Merzbacher disease (PMD; MIM#312080) is a rare X-linked recessive neurodegenerative disorder characterized by early onset nystagmus and hypotonia later evolving into spastic tetraparesis, dystonia, ataxia, and developmental delay usually beginning in the first year [1–3]. The main cause of PMD is alterations in the proteolipid protein 1 gene (*PLP1*; MIM#300401) on chromosome Xq22.2 [4–6], which encodes 2 proteins, PLP1 and the splicing variant, DM20, both of which are abundantly expressed in oligodendrocytes [3]. PLP1 is thought to play a major role in myelin sheath formation by promoting sheath compaction [7]. Within the heterogeneous group of dysmyelinating disorders, PMD accounts for 6.5% of all cases [8].

It has been proposed that patients with PLPI-related inherited dysmyelinating disorders should be clinically divided into 3 subgroups in order of decreasing severity: connatal, classic, and X-linked spastic paraplegia type 2 (SPG2; MIM#312920) [9]. Duplications of PLP1 can be found in up to 70% of all patients with PMD, indicating that increased PLP1 dosage is deleterious for normal myelination [10,11]. Point mutations in PLPI have been found in 10-25% of PMD cases with the entire clinical spectrum [11], ranging from the most severe connatal form to the least severe SPG2 form, depending on the affected domain of the protein [9]. Although there are characteristic clinical and radiological features of PMD [1,12], molecular and/or cytogenetic analyses are necessary for final diagnosis because PLP1 is only expressed in the central nervous system and there are no practical biochemical tests available. The first step in genetic testing should be a genomic dosage analysis of PLP1 because the major genetic aberration is duplication of PLP1. For this purpose, various methods have been used, including southern blotting [6], quantitative polymerase chain reaction (PCR) [13], fluorescence in situ hybridization (FISH) [14], multiplex ligationdependent probe amplification (MLPA) [15], and multiplex amplifiable probe hybridization (MAPH) [16]. Recently, microarray-based comparative genome hybridization (aCGH) has emerged as a novel technology that enables detection and determination of the size of the duplicated or deleted genomic intervals [17]. In case of normal dosage of *PLP1*, nucleotide sequences of *PLP1* should be examined [18]. Here, we report our recent studies to develop comprehensive molecular and cytogenetic analyses to diagnose patients with PMD and to understand the pathogenic mechanism of PMD and its correlation between clinical phenotypes.

2. Materials

Fifteen unrelated male patients (age span from 1 year to 20 years old) with congenital dysmyelination were referred to us for genetic diagnosis based on the clinical diagnosis as PMD. Clinical information and radiographic findings by magnetic resonance imaging (MRI) for the patients were obtained from attending doctors. Based on the approval by the ethics committee at the institution, informed consents were obtained from patient's families, and peripheral blood samples were obtained from all patients. Lymphoblast cell lines were established from lymphocytes extracted from peripheral blood samples by immortalization with Epstein-Barr virus. Three of the fifteen patients (P1, P3, P4) had been diagnosed as having *PLP1* duplications by previously performed comparative PCR amplification method (data not shown).

Genomic DNAs of the patients were extracted from peripheral blood samples using the QIAquick DNA Extraction Kit (QIAGEN, Hamburg, Germany). Metaphase or prometaphase chromosomes were prepared from phytohemagglutinin-stimulated peripheral blood lymphocytes or lymphocyte cell lines according to standard techniques.

One extra cell line (S1) that showed duplication of Xp22.31 including steryl-sulfatase precursor gene (STS) as determined by aCGH, was derived from a non-PMD mentally retarded patient and used for fiber-FISH analysis as a positive control of STS duplication.

Population-based control DNA samples were obtained from 100 healthy Japanese volunteers.

3. Methods

3.1. aCGH analysis

aCGH analysis, using the Human Genome CGH Microarray 105A chip (Agilent Technologies, Santa